

## 第 2 回 緊急時水循環機能障害リスク検討委員会

## －議事録概要－

## 1. 日時

平成 18 年 2 月 20 日(月)10:00～12:00

## 2. 場所

経済産業省別館 825 会議室

## 3. 出席委員(敬称略)

大垣委員長, 青野, 伊藤, 国包, 田中和博, 田中宏明(欠席), 千葉, 中林, 守田, 中村晶晴, 尾崎, 中村益美, 井上, 片山, 鈴木, 大久保, 三島

## 4. 議事(概要)

## (1)開会

## (2)議事

- 1)第 1 回検討委員会議事概要の確認
- 2)流域の水質リスク:淀川ケーススタディについて
- 3)都市の水リスク:東京都ケーススタディについて
- 4)その他

## (3)閉会

## 5. 主な発言内容

## ■流域の水質リスク:淀川ケーススタディについて

- ケーススタディの想定条件は夏期でいいとしても, 病原微生物によっては冬に感染が多いものもあることを考慮すべき。
- 河川は冬場の方が流量が少なくなること、水温が低くなると浄水処理の効率が低下すること等を考えると冬期の方が浄水場の運転管理が難しくなるため, 冬期と夏期のどちらがより厳しい状況になるか考慮すべき。
- 夏期は「病原菌にさらされるリスクが多く衛生環境が悪化する」という状況設定をさらに検討して欲しい。
- 地震により被災した下水道施設の回復に 3 ヶ月としているが, 3 ヶ月の間に季節は変わり, また被災して全壊した家屋は再建に至らず水道使用量が従前まで戻るわけではないため, 安全側で検討しているということを明らかにすべき。
- 今回の検討では, 上流側の被災下水処理場での対応の効果が分かりにくい。

- 河川の検討において、処理場からの放流負荷量だけではなく、流達負荷量の変動を考慮すべき。

■都市の水リスク:東京都ケーススタディについて

- 緊急時の水の需要を飲料・生活用水・業務用水などに分類し、緊急時の水需要に対して各水源が実際に使えるかどうかを検討すべき。
- 井戸については、現在使っているものか、浅井戸か深井戸かを分類し緊急時に使用可能かどうかについてさらに検討して欲しい。また、停電時に使用できるかどうかを判別することも重要ではないか。
- 下水道の被害と地下水汚染を関連させた検討を含めて欲しい。

■全体について

- 緊急時は、生命のことが最重要課題であることから、伝染病の予防など次回に向けて何が最も大切かがより明確になるよう全体をまとめて欲しい。
- 流域の課題(淀川ケーススタディ)と生活圏の課題(東京都ケーススタディ)を連結させたシナリオを作成し、それぞれのケーススタディは限定した条件下の個別シナリオとしてまとめるようにしてはどうか。

以上